

令和6年2月12日  
(2024年)

### 常任委員会行政視察報告書

委員会名	文教市民常任委員会
視察委員	委員長 有澤 由真 副委員長 後藤久美子 委員 五十川有香、久保 直子、玉井美樹子、野田 泰弘、 澤田 直己、小北 一美、橋本 潤
視察期間	令和6年1月15日(月)から1月16日(火)まで2日間
視察内容等	<p>1 視察先及び調査事項 1日目 東京都立川市 学校給食センターの設置について 2日目 東京都武蔵野市 ストリートスポーツ広場について</p> <p>2 調査の概要及び意見(立川市) (1) 立川市の主な事業概要 ア 立川市学校給食東共同調理場整備の経緯 平成27年9月、市長選挙において「防災力の向上、アレルギー対策の充実、中学校給食の完全実施のため学校給食共同調理場を新設」を公約として掲げた前市長が当選し、検討を開始。 令和5年6月30日に同調理場の整備が完了し、同年8月28日より市立中学校、同年9月4日より市立小学校へ給食が提供されている。</p> <p>イ 調理能力 市内の中学校全9校及び小学校8校を対象に、最大8,500食/日(小学校4,000食、中学校4,500食、食物アレルギー対応食最大4メニュー150品を含む。)の供給能力を有する施設として整備。</p> <p>ウ 整備方針 (ア) 施設整備と給食調理 「学校給食衛生管理基準」及び「大量調理施設衛生管理マニュアル」に準拠するとともに、HACCP(Hazard Analysis and Critical Control Point)に準拠した作業区域の確保と衛生管理が整った施設とし、HACCPに準拠した調理の工</p>

程管理を行っている。

(イ) 食物アレルギー対応の実施

食物アレルギー対応食専用室を設置し、食物アレルギーのある児童、生徒に対して安全にアレルギー対応食を提供している。

(ウ) 望ましい食環境の確保

温かくかく作りたてに近い状態での給食提供を実現し、調理工程の工夫によりバリエーション豊かな手作り献立の提供に努め、おいしく充実した給食を提供している。

(エ) 災害時に対応できる学校給食施設

災害時に必要なアルファ化米の備蓄（約11万食）や受水槽（約70 t）の設置、万が一ライフラインが止まった場合にもアルファ化米を使用した温かいご飯が提供できる機能を備えている。また、調理場の車庫等を活用した物資の搬出入、給食配送車を活用した一時避難所（小・中学校）への災害支援物資提供を行う二次集積拠点である。

(オ) 食育機能の充実

映像で調理風景を見学できる食育機能を導入するとともに、立川市の学校栄養職員等が事業者の栄養士や調理員とともに学校訪問を行うなど、食に関する指導の充実に取り組んでいる。また、調理場敷地北側に「新・食育のみち」を整備し、食に関する植物を植えて、食への学びを促進している。

(カ) 周辺への配慮

敷地周辺には、国営昭和記念公園、広域防災基地、陸上自衛隊立川駐屯地、住宅等があるため、周辺の景観や環境、機能等に配慮している。

(キ) 環境への配慮

省エネルギー、省資源に配慮した施設整備、維持管理、運営を行い、地球環境の保全及び環境負荷の低減に寄与している。また、ガスコージェネレーションシステムや太陽光発電設備を設置している。

(ク) 民間ノウハウの導入

民間ノウハウを活用し、サービス水準の向上と財政負担の軽減を図っている。施設整備に係る初期費用だけでなく、維持管理、運営を長期一括で行うことにより、事業期間全体にわたるライフサイクルコストの縮減を図っている。

(2) 主な質疑内容

- ア 新学校給食調理場の設置に至った経緯
- イ 事業用地選定までの検討経過や課題及び選定理由等
- ウ 導入経費及び整備手法（施設整備に要した費用や国、都の補助金の内訳）
- エ 食物アレルギー対応食について
- オ 災害時対応機能について
- カ 米飯給食について（提供回数が増えた理由、地産地消への取組等）
- キ センター方式への移行に伴う各校の対応について
- ク 同調理場の市民等の利用について

(3) 委員会としての所感

- ア センター方式でありながら、利用者である児童、生徒の声を聴きながら献立を作成しており、また、手作りにこだわっている。市民の満足度を考察し、取り組む姿勢はまさに理想的である。
- イ 調理場内に食物アレルギー対応食専用室を設置し、対応食を1日最大4メニュー、150品を供給できる体制が整っている。手作りにこだわりつつ、アレルギー対応にも特化することは容易ではなく、立川市の給食に対する取組は、大いに参考になると感じた。
- ウ 災害時に対応できる給食調理場という点において、万が一ライフラインが止まった場合の対応（プロパンガスを常備、災害用トイレのマンホールがある等）については、本市における給食センターの設置検討の参考にしたい。
- エ 敷地の北側には、緑豊かな周辺環境と調和した「新・食育のみち」を整備し、食に関する植物が植えられており、食育に特化した給食調理場として、訪れた子供たちにも新たな学びを提供できる良い取組だと感じた。
- オ 給食部会において地元農家と連携し、市の意向をしっかりと伝えた上で地産地消を実施している姿は理想的だと感じた。地産地消は、故郷への愛着や身近な生産者に対する感謝の気持ちが芽生えるため、吹田市においても推進している。立川市の取組を参考にしながら引き続き推進していきたい。
- カ 夏休み等の長期休業期間には、市民対象の親子料理教室イベントを開催するなど、給食調理場を無駄なく活用する取組は非常に興味深い。
- キ 同調理場の敷地面積は1万2,000㎡で、用途地域は市街化調整

区域である。また、周辺は、陸上自衛隊立川駐屯地、国営昭和記念公園、広域防災基地、住宅用地といった状況であり、本市において給食センター用地の選定は容易ではないと感じた。

#### (4) 各委員の所感

ア 当該施設は現在計2か所あり、最大1万5,500食の調理ができる。災害時の対策としても機能する画期的な空間だった。また、徹底的なアレルギー食への対応が印象的で、具体性に感銘を受けた。さらに、衛生的な手作り加工にこだわった愛情とユーモアにあふれる給食体制は非常にすばらしかった。吹田市でもノウハウを応用し、子供たちに「安全」「安心」で「おいしい」給食提供に努めることを推進したい。

イ 立川市の学校給食は手作りが中心で、米飯など様々な工夫している点は子供たちにとって非常に魅力的だと感じた。また、授業で調理場見学を実施するなど、子供たちの食育につながるような取組も良かった。自校方式からセンター方式に移行した学校があったという背景から、極力自校方式に近づけるような配慮をしていると感じる点も多かった。さらに、栄養士の力量やその思いをいかに運営に反映するのかが、本市にとっても有用であり、大いに参考にしていきたい。

ウ ハード面の計画段階から栄養士が関わることで、子供のことを思った献立等、ソフト面の要求水準書を作り上げており、また、食中毒のリスク回避の体制として、隣接はしているが、2か所の共同調理場で食数等が配分されている点は理想的で、さらに、昨今の震災被害等から、防災機能は必要だと、現地を見てより実感した。委託という運営形態であっても、自治体が責任を果たすという姿勢も含め、立川市の例は、吹田市の課題解決に資する取組を委員間で共有でき、前向きな議論につながる学びとなった。

エ 立川市はセンター方式でありながら、とことん手作りにこだわっており、児童、生徒へのアンケート調査では、給食の味や温かさなどの満足度が90%以上である。本市においても検討を進めている給食センター整備の参考にできればと思う。

### 3 調査の概要及び意見（武蔵野市）

#### (1) 武蔵野市の主な事業概要

##### ア 武蔵野市立ストリートスポーツ広場設置の経緯

平成7年度、平成9年度の市議会において、ストリートスポー

ツに関する質問があり、市長が青少年対策の特徴的事業としてインラインスケート教室を開催した。これが好評であったことと、平成12年7月に、市内在住の20歳の青年からインラインスケートやスケートボードのできる広場の設置についての要望が市長に寄せられたことがきっかけとなり、恒常的な施設の設置についての検討が始まった。その後、近隣自治体等の視察や愛好者との意見交換を行い、平成14年4月6日にオープンした。

イ 武蔵野市立ストリートスポーツ広場の目的

(ア) 若者・愛好者の居場所づくり

(イ) 異世代交流の場・健全な交流の場・コミュニティ形成の場・挑戦する場の提供

(ウ) 地域の特色あるストリートスポーツの普及

ウ 施設の概要

(ア) 特徴

スケートボード、インラインスケート、BMX等をスポーツとして楽しむ場

(イ) 面積

730㎡ (35m×21m)

(ウ) 設備

滑走路419.6㎡ (タフトトップコート3mm舗装)、ランプ(滑走台)7台、スチール製レール2台、台状のコンクリートボックス2台、照明設備3灯、施設周囲に簡易フェンス

(エ) 設置場所

市立体育施設敷地内

(オ) 使用時間

平日：午後1時～午後8時

土・日・祝日：午前10時～午後8時

※土曜日の午前10時～正午は未就学児・小中学生限定

休場日：毎月15日(土・日・祝日に当たる場合は翌平日)、雨天時

(カ) 使用料

無料(滑走時間の制限なし。個人使用のみ。)

エ 事業費

総額1,963万2,900円(特定財源として東京都いきいきまちづくり事業交付金 858万3,000円)

オ 今後の展望と課題

ストリートスポーツを通して若者が身体と精神を集中して

スポーツを楽しみ、可能性に挑戦し、愛好者相互の交流を深める場として今後も多くの若者に利用してもらうとともに、小・中学生にも特色あるスポーツとして体験する機会を設け、引き続き幅広くストリートスポーツを普及していく。

管理、運営については、利用者の反響、周辺住民の声を聴きながら、施設周辺の環境保持、施設内の安全対策により一層配慮するとともに、利用者にも自分たちの広場は自ら守る意識を持つように促している。

## (2) 主な質疑内容

- ア 武蔵野市立ストリートスポーツ広場設置の経緯について
- イ 事業費の財源について（補助金等）
- ウ 運営上の問題点等について
- エ 一日の利用者数について
- オ 広場の管理体制について
- カ 雨天時の利用について
- キ 利用時の申請方法、「愛好者カード」等について

## (3) 委員会としての所感

- ア 市民（20歳のストリートスポーツ愛好者の青年）が市長に手紙を送ったことがきっかけで設置されたストリートスポーツ広場。理想的な市民自治の姿であり、行政が市民に寄り添う姿勢が感じられた。
- イ ストリートスポーツを実施する際、騒音問題や周辺住民との意見の相違等懸念されることがたくさんある中、武蔵野市は、いわゆる「既成概念」を払拭することに成功している。例えば同広場は中学校に隣接しているが、特段、苦情は寄せられておらず、運営にも支障は出ていない。これは、周辺住民との話合いや行政の工夫による結果であるが、本市も参考にできる点が多々見受けられた。
- ウ スケートボードやBMX等のストリートスポーツは、東京オリンピック2020の競技種目として扱われたことで世間に注目されるようになったが、武蔵野市は、1999年（平成11年）にはストリートスポーツのイベントを開催しており、工夫を凝らして先進的な取組を行う姿は、是非参考にすべきだと感じた。
- エ ストリートスポーツという比較的新しいスポーツを通して異世代交流やコミュニティ形成がなされることは、新しい市民交流

の形であると感じた。

オ ストリートスポーツ広場の利用者に対するマナーやルール遵守が丁寧に促されていることにより、周辺住民との対立や、施設周辺での事故等の未然防止につながっていると感じた。

カ 市民の声が形になり設置されたストリートスポーツ広場の存在は、市民にとって政治が身近に感じられる事例であると感じた。

#### (4) 各委員の所感

ア 当該広場は、武蔵野市総合体育館の外側に位置し、体育館職員によりマナー等の案内、誘導もなされている。施設は無料で使用でき、ヘルメットも無料で貸し出されている。設備としての初期費用は約2,000万円で、若者やストリートスポーツ愛好者の居場所作りとして理想的な場となっている。類似したアプローチを導入し、吹田市でも、若者達の健康的なスポーツ活動や交流を楽しむ場の促進に努めたい。

イ 当該広場の面積は730㎡でコンパクトにまとまっており、本市内での整備も十分可能と思った。また、決定プロセスが、スケボー利用の若者たちと行政が話し合いを重ね、市長の決断をもって他の住民の理解を促したという経緯で、市民と行政との距離の近さを感じた。改めて、本市でもスケボー等利用者のお声や地域の苦情等のニーズを把握、整理し、必要な段階での市内設置に向けた検討の可能性を感じた。

ウ 議会質問や愛好者の声がかきつけとなった当該広場は、安全対策や利用者のマナー遵守などが丁寧に進められており、スポーツとして住民理解も進んでいる。小・中学生の時間帯を設け、次世代を見据えるなど、居場所作りの観点でこの分野に限らず参考になる取組であり、作るだけでなく、様々なことを乗り越え、育てることに、自治体を実施する意義があると改めて思った。

エ ストリートスポーツの実施において、最も懸念されるのは騒音問題と言われている。当該広場は中学校が隣接しているにもかかわらず、保護者等のニーズに沿った様々な対策を講じることで、今ではほとんどクレームはないとのことであり、吹田市における検討経過や供用開始後の対策も含めて、議会等で現在の進捗状況等を聞きたいと思う。